世界に開く窓
1974年10月

批林批孔運動

の背景

中嶋 嶺雄

(東京外国語大学助教授)

伊藤 喜久蔵

(東京新聞アジア太平洋調査会)

対談

に大きな問題が残っていたというふうに見ざるを得ないですね。

伊藤 そうすると先生のお考えは、やはりこれは国内に何かこういう問題を起さざるを得ない。あるいはこういう運動の対象となるような何か政治的目標なり、政治勢力なりがあるという、決してこれが単なる文化革命と申しましょうか、思想改造とか、人々のブルジョア的な考え方は改めるんだと、そういう単純な思想改造運動じゃなくて、もつとドロドロした政治闘争だ……。

中嶋 その反映として見ざるを得ないんじゃないかという気がするんです。

伊藤 そのあたりに問題になっておるんですが、日本の北京特派員あたりが伝えてきておりますのは、どちらかと申しますと政治闘争を否定しているような報道がございますね。

中嶋 ええ、そうですね。

伊藤 北京から打ってきております外国の報道機関の報道も同じくそうなんです、それはやはり政治闘争説、中には周恩来首相を攻撃目標としておるんだというような批判が多ございますね。

これももう少し申さしていただきますと、周恩来首相が、カウ ندا というザンビアの大統領歓迎の宴会で演説をしたそうです、その中でいま中国がすすめている林彪批判、孔子批判運動の性格を意義づけまして、これは林彪批判と整風運動の継続であり、その深化であるんだ。

これは国外の反動派がこの運動に対して行なっているのはたいへんなデマである。ましてや一部の政治家に対する攻撃などというのはとんでもない誤りだ。的はずれもはなはだしいと申したというふうなことを打ってきておるんですが、周恩来氏はなぜこういうふうなことを、こういう公式の場でしゃべらなくちゃならぬのでしょうか。

中嶋 そうですね。核心に触れてきたわけですが、わたくしはまずしもいままご指適のように、これが純然たる思想運動、あるいは文革の継続という、そういうイデオロギー・キャンペーンにとどまるとするならば、なぜ十全大会でも明らかのように中国にとって林彪一派という一握りの大衆から孤立した、一部のグループの陰謀であったものを、これほど批判しなければいけないかという問題がございますし、もう一つには中国のこれまでのイデオロギー・キャンペーンを見ますと、それは常に当時の政治潮流を反映してきたという過去の歴史を考えて、いまの主張を顔面どおり受け取っていいかどうかという問題があるわけですね。

そしてわたくしは周恩来が最近外人記者とか、外国の人とのレセプションなどでこの問題を取り上げ、これは特定の人物を指すのではないということをおっしゃること自身に、かなり実は周恩来に対する批判が内部に潜在してゐるんだ。それ

伊藤 最近中国では林彪批判とか、孔子批判というような運動がやかましく伝えられており、日本人としては急になぜ孔子を批判しなくちゃならんのだろうかということであるという話題になっておるようですが、なぜこんな運動をいまごろやらなくちゃならんのだろうか。そういう点、いかがでしょうか。

中嶋 そうですね、基本的なことを申しますと、中国は革命後、新しい国家を建設してから二十五年たつわけですが、やはり中国の伝統的な思想である儒教思想が、ことばとしては消えても、中国人の生活の中になんか根深いものが残っているということはいえると思うんです。

伊藤 いい教えですすからね。

中嶋 はあ。しかしながらなぜ今日非常に大衆運動として、激しい孔子批判が展開されているかというところは、これは現在の中国における政治の潮流をめぐる非常に複雑な問題があるんじゃないかという気がするんですけどね。「批林批孔」という運動にだんだん展開してきているわけですが……。

伊藤 「批林批孔」というのは、林彪批判とか、孔子批判ということ……。

中嶋 そうですね。ですからこれがやはり、林彪事件以降の中国内部にわたる問題が、去年の夏に十全大会があり一応決着が付いたかに見えたが、しかしその後から、孔子批判運動が非常にクローズアップされたことと含めて、そこ

に対する一種の防衛策ではないかという
気もするわけです。

わたくしはこの運動が必ずしも周恩来
打倒に、発展するとういうふうには申し
ませんが、しかし明らかにその潮流の中
に、いわば潮流反潮流の動き、あるいは
復辟と反復辟、旧幹部の復活に反対して
る、こういう問題を含めて周恩来批判の
色彩、つまりそういう圧力が強まってき
たというところだけは確かだろうと思うん
です。

伊藤 なるほど。

中嶋 どうも見てますといろいろの潮
流が、つまり十全大会というのは一種の
妥協的な調整的な連合体だろうと思いま
すが、その中にはいろいろの矛盾があるわ
けで、その矛盾をそれぞれに自己の立場
に引き付けながらこの運動にいま全員が
参画してゐるんですが、それぞれの目的や
意図がいろいろあるんじゃないか。その
中でやはり反潮流運動といいますが、こ
れが明らかに周恩来批判的な動きも出て
きてるということは否定できないんじや
ないかと思えます。

伊藤 なるほど。周恩来首相はこうい
うふうにおっしゃったわけですが、われ
われは政治家の言うことを顔面どおりに
受け取るとは慣れてませんので、どっ
ちかといえはいろいろと勘繰つてきたん
なるわけで、そういう点で北北京の指導
者も、自分の言うとおりにまぢがいないん
だ、何もそう勘繰る必要はないんだとお

っしやりたいのかもしれないませんが、何に
いたしましても最近出ておりますこの状
態はやはり異常な状態の一つである。

ですからここに異常なものに当然いろ
いろと勘繰る者が出てくるわけ。いまま
でがいままででしたですから、現在もや
はりそうならざるを得んわけなんです
ね。それで、こういう運動が出てきた背
景としては、最初文化革命が一九六六年
から始まり、ずっと紅衛兵など左派のつ
きあげが出てきたが、それが劉少奇、を
打倒したあととは、さらに攻撃の火の手を
どんどん、どんどん激しくしていくの
で、国内が極度の混乱状態になって、そ
の收拾のために軍なんか出てくる。その
軍が勢力を持ちすぎたので、この軍の代
表者である林彪の勢力を毛沢東として倒
さざるを得ない。そして倒したあとで今
度は周恩来首相を頂点とする旧幹部、こ
の人たちが進める政策とか主張はどちら
かといえは現実的な穏健な路線だと言わ
れておりますが、こういうものがこの
二、三年来ずうっと表面に出てきた。だ
からそういうものが出てきたことによつ
て、いったい文化革命とは何ぞやとい
うようなことがあらためて問ひ直されてき
て、中国国内には文化革命の意義をも疑
う者さえ出てくる。

こういうことは「人民日報」にもちゃ
んと載つております。ですからやはりそ
ういうことであらためて文化革命を意義
付ける必要があるんだ。そういうものを

進める勢力は当然あるし、進めるかたに
はそれに反対している勢力も当然あるわ
けです。ですからこの二つの勢力の対抗
というような局面にもなっておるんじや
なからうかと、わたしは思うわけです。

中嶋 そうですね。ですから一般論と
して解釈すればいろいろな解釈ができるん
ですが、もう少しいまの中国で主張され
ている論理を分析して考えてみますと、
やはりどうも文化大革命がやがていわゆ
る脱文革というような周恩来路線的なも
のが表に立って来た中で、七二年ぐら
いから階級闘争を忘れちゃいけないんだと
いうような主張が一方に断続的に出てい
るわけですね。

それから一方、たとえばこれはよく聞
題にされるんですが、七二年十一月の
「紅旗」の論文なんかを見ますと、実は
すでにそのころから始皇帝の問題、中で
は出ており、始皇帝はむしろ非常に革命
的な君主だと言われているんですが、やは
り始皇帝は暴虐な王朝であった。

しかも一部の者は、地主、ブルジョア
階級の反故の山から若干のたためな資
料を捜し出してきて、幾千年もの階級闘
争の歴史を政変陰謀史に歪曲してあとづ
けている。あるいはこれはことしの「紅
旗」に載つたのですが、古人のところか
ら、プロレタリア階級攻撃の武器を捜し
出してきて、歴史上の亡霊を呼び出して
きて、その反革命的復活に奉仕させよう
としている。明らかにいまの始皇帝評価

とか、孔子批判なんのやり方は、歴史
の真実を自分の都合のよいように歪曲し
てやるものだと、うような、それに対す
る反発の意見もありませんからね。こう
いうものを見たりおきますとやっぱり根深
い、潮流と反潮流の闘争が内部に潜在し
ている。そのことがやはり、たとえば人
民代表大会なども開く、開くと行って依
然として九年半近くなるわけですが、開
かれいない。

これはやはり明らかに状況が正常化さ
れていない。それからその中にどうしても
周恩来批判だと見られるような文脈は、
これはご承知でしょうが、たとえば秦王
朝の中に儒者もぐりこんで、中から王
朝をくつがえそうとして革命の成果を台
なしにしてしまつたと。

伊藤 何かありましたね。

中嶋 ありますね。そういうような主
張の中に、とくに政府部門と、政府機関
と文化部門を握った者がいるというよう
なことでですね。それからそういう連中は
巧みに世論を操作して、世論を作り上げ
ていったと。それから『呂氏春秋』の編
さんについて呂不韋について触れたとき
に、秦の宰相になった呂不韋は折衷主義
であるというふうな、そういうことを言
ってますね。

伊藤 何か、こうえらく、宰相です
からいろいろと勘繰りもできるわけです、
そういうことは。

中嶋 そうです。こういう文脈が出て

ることは、いまのご指摘のような問題が残っているし、最近の状況を見ますと、それが名指の周恩来批判ないし周恩来打倒までいくかどうか、これはいま歯止めがかかっておりますね。

最近の「人民日報」の社説なんかを見ますと、いまの運動は人民内部の運動として、そういう歯止めがかかっておりますが、これはたしてその歯止めがいつかはずれるかもしれない。でもそういう圧力はこのところ、たとえばベートーヴェンやシューベルトを批判したり、イタリアの映画監督のミケランジェロ・アントニオニの「中国」という作品を批判したり、それからオーエン・ラティモアさんなんか。この方われわれから見れば中国にむしるシンパシーを持っておられるわけで、そういう方を批判するとか、それから西沙群島において対外的に非常に短期決戦に出るとか。

伊藤 やっぱ中国は武力を行使しなすね。

中嶋 ええ、そういう問題。それから日韓大陸だな協定をめぐる非常に強い態度。それから青嵐会批判に見られるように、日本軍国主義についてふたたび触れだしたという、こういうことをすうとつなぎ合わせてみますと、これは周恩来を名指しの批判にまで展開するかどうかは今後の情勢を見なければわかりませんが、どうも状況はかなり、どちらかというところ圧力が内部に強まっているんじゃないかというところを、勘繰りざるを得ないのすうかがいでしょうか。

伊藤 そうですね。いま先生のおっしゃいましたお話は、結局孔子批判の運動が始まりましたのが一九七二年の楊榮國という人の論文からですね。それから一方的に孔子批判、林彪批判という、どっちかといえは周恩来あたりを目ざしているんじゃないか。そういう式の論文だけじゃなくて、むしろ周恩来派じゃないか、あるいは穏健派の主張じゃないかと思われるものがチラチラと露呈して、二つの主張が入り交じって出てきておる。しかも左派の論文にはただ単に林彪批判孔子批判というだけじゃなくって、いわゆる林彪のたぐいの、政治ペテン師といううなことを使ったりしたり、いま先生がおっしゃいました呂不韋の「呂氏春秋」あたりがいわゆる折衷派だという、周恩来首相にびたりといううなことを使っているといううなところは非常に思わせぶりなんです。

中嶋 そうですね。

伊藤 すから、この左の主張がやはり最近弱められたといえますか、周恩来実権派のほうと、穏健派のほうと、左派のほうで、どうも去年の暮の重要な会議あたりから妥協が成立して、この問題を人民内部の矛盾で処理する。やはり批判はするが団結はしていくんだといううな線できしになってから進められておる。そういう線は去る二月二日の「人民

日報」の社説なんかにも出ておりますが……。そうは言われておってもなおいまでもが相変わらず出てくる。しかも一方でそれに対抗するかのようなのがチラチラと出てくるし、周恩来首相に至ってはこういう公式の席上で、「そうではないんだ」ということを言っておる。

ですからわたしはこの主張は非常に激しくいまりぶつかり合っていると思うんですが、ここで肝心の毛沢東主席はこの運動についてどういうふうにかかっているんだらうか。今度の運動は毛沢東主席自らが発動し、指揮しているんだということがこの二月二日の人民日報の論説に出ました。それまでは、いやこの運動を実際に指導しておるのは周恩来首相なんだと。毛沢東主席でなく周恩来首相がこの運動を自ら進めて、そうして進めることによつて自らの地位も固まり、自分の安全も保てるんだと。だから現在は周恩来首相がこういふ内外の政策ももちろんのこと、こういう大衆運動の面も周首相がほんとうの指導者なんだといううなことを言う人もございます。けれども二月二日の人民日報の論文は、かつての文化革命がそうでありましたように、やはり毛主席自らが発動し、指導してると、はっきりと明言したわけですね。ですからやはりこの運動も、毛沢東主席がなんらかの目的目標を持って進める運動でなかろうかと思うんです。ですから

周首相がこれほど公式の席上で発言される以上は、やはり毛沢東主席の間で何かやはり話し合いを行なって、その上でやられておると、わたしはそう思いたいわけなんです。

どういふ話し合いであつたかと考えますと、先ほど申し上げましたように昨年暮から方針がやや変わってこの問題は人民内部の矛盾であると、お互いに批判することはいいが団結していくんだと。かつて毛沢東主席は紅衛兵の団結を強調されましたときに、紅衛兵の一人が「あの男は右だからだめなんだ、団結できないんだ」とこう言ったときに、毛沢東主席は、「右結構じゃないか、左右が団結することほんとうの団結じゃないか」と。非常にいいようにあしらったわけです。今度もそういう考えもやはりあるんじゃないかと思うんです。まあ実際のねらいはまた他にあると思うんです。しかし、ただ単に今度周恩来首相らの幹部をねらっているだけじゃなくて、もっと実権を持っていたという軍を目標にしているんだといううな見方もございますが、いかがですか。

中嶋 やはり一つのカギは軍だろうと思えますね。ご承知のように一月の初旬に地方大軍区が、正式には部隊といいますが、大軍区の司令が大幅に移動されたわけですね。これは考えてみますと、いわば中華人民共和国建国以来地方の軍司令官がこれほど大幅に動いたことはない

わけですから、しかもたとえば許世友、

陳錫聯、韓先楚、楊得志という人は、み

な十四年、十五年、十九年と長い間地方

に盤踞していたわけですね。許世友なん

か十九年も南京地方にいたわけですが、

これらの人たちが動いた。それは見方に

よれば、つまり地方に根を張ってした軍

を動かしたんだから、いまの一連の党が

軍を指導するという一元化指導の方向に

従って、軍人の持っていた土着主義的な

勢力の根をそいだんだというふうに見る

見方もあるわけですか、どうもはたして

そうだけで見ているのかどうかという問

題もあるわけです。

というのは、今回の軍司令官の移動を

見ますと、それほど地方に盤踞してい

たんならばだれか一人くらい失脚しても

いいわけですが、決して左遷されている

わけではないんですね。むしろ、それぞ

れ重要な地区に新しく出て行っているわけ

です。そういうことを見ますと、こうい

ういわば従来から林彪系でもない、そう

かといって周恩来系でもない、むしろ地

方に根を持っていた軍人が大きいわけ

問題を握っていたことは事実で、それを

動かしたんだがやはり完全に軍の力をチ

ェックできたというふうには見られない。

むしろこれらの人たちは今後中ソ関

係がかなり深刻になりますと、いずれも

対ソ臨戦体制という、いまの中国の共通

の大きな国家目標の中で、ふたたび大き

するわけですか。

ですからこういうことをチェックしよ

うという動きはあるし、それはまさに中

央から官吏を派遣した軍権制などをた

たいて、秦の時代のことを思い出させて

いるという状況ありますが、一方で今回の

状況は、中ソ関係が非常にシリアスな問

題を含んでおりますから、対ソ備戦体制

の強化ということを含めて、やはり軍が

今後のキャスティングボードを握ってい

くんではないかという気がするんです。

そういう意味で軍が今回それほどまだ、

批林批孔運動の中核ではないですね。む

しろ民兵とか何かはずいぶん参加してま

すが、軍人が文革のときのようにあれし

ませんからね。やっぱり今後の出方を見

て、じつと状況を見ているのが軍だとい

う、そういう意味でわたくしは軍に注目

してゐるんです。

伊藤 ここで軍の動きについて大きな

問題がありますのは、文化革命の闘争の

中で毛沢東は、軍の力を借りて劉少奇の

党を倒したんだと言われておりますでし

ょう。ところがその肝心の軍を指導して

いた林彪を倒したということですから、

軍の内部にいろいろと問題がいまも残っ

ておると尾を引いておると思うんです。

尾を引いておるからこそこういう林彪批

判の問題がいまでも行なわれておるんだ

と思うんですが、現在そういう軍に大き

な問題を残してしまつた。そういう状況

を始めた。要するに旧幹部という、どっ

ちかといえは現在もやはり中国を指導し

ていく人たちが攻撃の目標にしたとする

ならば、そういう人たちがいったいどう

いう力を背景にしてこれと戦つていくの

か。

ただ単に「人民日報」や「紅旗」やな

んかでわあわあといったたり、毛沢東主席

の絶対的な権威だけをバックにしたり、

一部左派の大衆運動といいますが、あち

こち壁新聞を張つたり、内部でわあわあ

と言つたりしたようなもの。大衆組織と

申しますと最近では労働組合だとか、婦

女連合会だとか、あるいは紅衛兵だとか、

共産主義青年団いろいろございますが、

そういうものをバックにする。じゃ

何をバックにして闘争しようとしているの

か。軍というものはたしてどの程度毛沢

東の側にいるのか、いないのか。わたくし

はその点軍の動きというのが、やはり重

要だと思つてございませうがね。

中嶋 たしかにこれらの残つてゐる軍

の首脳者は林彪系の軍人ではなかつたに

しても、林彪だけではなくて総参謀長以

下一握に軍首脳が失脚してまつたという

生々しい傷跡を見えますからね。いまじ

つと軽率妄動せずに慎重に構えてるんじ

やないでしょうか。そしてふたたび、か

りに人民解放軍がこの政治闘争に参加し

てくれという要請があつても、おそらく

軍はその点慎重ではないかという気もす

伊藤 慎重に構えているというかな

なか動かないという……。

中嶋 ええ、今後の情勢いかによつ

ては、また逆に不安定要因にもなり得る

ということですよ。たしかにいまいるんな

問題ありますが、中国は一つには中ソ関

係が悪い。それから周恩来を批判した勢

力はあるんだが、今日の中国ではたして

周恩来を失うことができるかという大き

な問題がありますから。

伊藤 そうですね。左派の主張が強く

なつてきておる。そういう情勢だけに余

計周恩来首相の国際的な声望といいます

か、人氣が中国にとっては重要になると

思うんです。そういうときに周恩来首相

そのものが力をそぐとか、現実には周恩

来首相が地位から去るといふようなこと

はたしてできるかどうか、これはわたし

非常に問題じゃないかと思つてます。

中嶋 そうですね。

伊藤 どうもありがとうございます。

(二月二十五日放送)

「世界に聞く窓」は毎週月・金の
午後七時から三十分日本短波放送
NSBで放送しております。
どうぞ本誌と合わせて御聴取下さ
い。